

私はいつものように、スマートフォンで動画を見ている。母は、昼食を食べ終わりお皿を洗っている。兄と父は、実家へ野菜をもらいに行っているところだ。動画を見てお母さん、途中、ふと空を見上げると、薄暗い雲が空を覆っていることに気づいた。「ねえお母さん、空なんかやばいよ。めっちゃ雨降ってきそう。」

母はあまり気にしていない様子だ。その時、突然空が暗くなり、ザアザアと激しい雨が降り出した。木が右に左に激しく揺れている。見たこともないような土砂降り。雷が光っては鳴る。「ちよつと待って。雨、やばすぎる！」

想像を超える量の雨に怖くなり、テレビの電源を入れた。画面には、とてつもない量の雨と、茶色く濁り、今にも氾濫しそうな米代川が映っていた。そして、赤文字で緊急避難指示の文字。

私たちは、すぐに避難の準備を始めた。食料や着替え、タオルなどをバックに詰め込む。車に乗るおとも苑に到着。すでに、数えきれないほどの人がいた。ひと安心はしたものの、まだ不安でいっぱいだ。

檜山の家にいる父や兄、祖父母は大丈夫だろうか。心配が募り、ラインで連絡をするが、「既読」がつかない。画面上には、自分が送った文字が映し出されるだけ。

「だいたいどうぶ？」「おい」「返事してよ」「ねえ……」

だんだん文字を打つ手が遅くなる。大雨で土砂崩れが起きて、家ごと飲み込まれていたら。心が揺らいだ。私の心は、不安と悲しみで押しつぶされそうになる。

思わず涙がこぼれそうになったその時、ピコン、スマホの通知音が鳴る。

「安心しろ」「無事だよ」兄と父の、いつもの生き生きした文面だ。本当に、よかった。みんなが早く合流できますように。私は、心の中でそつとつぶやいた。

十一月二十六日土曜日のことだった。朝から大雨が降り、この日部活が中止となり、僕は心配しながら外を眺めていた。空はとんでもなく暗く、家が壊れそうなくらい雨が降っていた。すると突然、ニュース速報が流れた。

「大雨警報が発表されました。」と。僕は一目散に部屋から出て、ニュースを見ているなかつた家族に伝えた。二時間が経ち、僕は勉強をして、朝食を早く食べることにした。そのことを知り、僕もより早く食事を早く食べることにした。食べながらラジオを聞いていた。すると、避難指示が発表された。

これは大変だ：・すぐに玄関の横に置いていた非常用の持ち出し袋を持ち、準備していた。玄関を開け、近くにある高台まで逃げようとする、祖父が僕を止めてきた。今は外に出るのは危険だ！「カップを着て歩いて逃げることにした。僕は雨が降っている中、カツパを着て歩いて逃げることにした。

十一月二十六日（土曜日）午後二時。僕は、家でまんがを読んでいた。母は、二階で洗濯物を干していた。兄はその頃、部活で野球の練習をしていた。だんだん、雲が黒くなっていきた、急な雨が降り始めた。すぐには、やむ。だろうと思いがらいたけど、だんだん、雨が強くなっていき、災害級の雨が降っていた。

秋田県内全域に非常に強い雨が降っていた。

米代川と檜山川が氾濫して、浸水している家屋もあると情報が入った。僕はすぐに、避難する準備をした。大切なものをリュックに入れ、避難しようとした。

「そうこうしているうちに、停電が起り、家にいるのも危ないと思った。すぐに、避難しよう！」と母に言った。ちよつとだけ悩んだ母だったが、すぐに

「その後、思いつく限り荷物をまとめた。」

僕は、内心パニック。でも、落ち着いて車に乗った。雨が激しく前があまり見えな

かった。そのままと不安が小さくなった。

「おとも、兄に着いた。少し不安が小さくなった。出ない。ドキドキした。すると、すぐ、兄に連絡をした。何回もコール音を鳴らした。みんな無事だよ。すると、と兄が言った。大丈夫？　ほっとした。今、練習中断したよ。能代高校野球部、みんな無事だよ」

二〇二二年十一月二十六日（土曜日）午前十一時四〇分
僕は午前中の部活を終えて家に帰り、完全にリラックスマードになっていた。

（雨が強いなあ……）

テレビを見ていたその時、

「ドーンカラガラ！」
「遠くで何かが崩れる音がした。」

午前十一時五五分

僕はすぐに何があったかわからなかった。二階にいた母に今の状況を知るためにどこで何が起きたか聞いた。母は「山崩れ、檜山川、米代川が氾濫したらしい。」

僕の家は近頃は山崩れ、檜山川、米代川が氾濫したらしい。

「避難するから準備して。」
母が二階から降りてきた。

僕は、枕元に置いていた「非常時ボックス」一式と、服、食料を急いでかばんに詰めた。

十二時一〇分
避難場所はとも苑。母の車で向かった。道路の脇を流れる檜山川の様子が、明らかにいつもとは違っていた。

十二時四〇分
途中、渋滞もあって、いつもより時間がかかった。おとも苑、人があふれ、騒然としていた。学童もあつたため、いつもより時間がかかった。おとも苑、人があふれ、騒然としていた。父とも合流できた。この日のことを、僕は決して忘れてはいない。誓った。

行っていた。父とも合流できた。この日のことを、僕は決して忘れてはいない。誓った。

学校から帰った。

家に帰ってから宿題をする前に、私は必ず友達に電話する。その日の出来事や最近あった話をその子に伝える。今日は雨が降っている。

部活帰りの私は、毎回へとへとになりながらも気分を改めて、その友達に電話している。

二十三時ころだった。

急に雨が強くなった。

雨で電波が悪くなったのか、友達の声がとぎれとぎれになった。

「聞こえる？ 聞こえる？」屋根に当たる雨の音が部屋に響き渡る。

妹が「雨すごくくない？」と言いながら私が入った部屋に入ってきた。

ぷつつと友達との通話も切れた。

さすがにやばいと思っただけは、外の様子を知るために、とりあえずテレビを見た。

妹も私についてくる。

テレビには大雨警報が出ていて、避難するようにと秋田県じゅうに出されていた。

母も、父も、姉も、みんな仕事に行っている。

このことをみんな知っているのだろうか。私は急に怖くなった。

妹はきつと困惑している。自分しか頼れない状況で、私は泣き出しそうになる。

すぐにでも逃げ出せるように準備をした。一応母に連絡したらつながった。

「もうすぐ帰るから。父さんもいる。」よかった！

父母が帰ってきたら、大雨が少しおさまっていた。

友達にもう一度連絡してみた。つながって少し会話した。私はほっと胸をなで下ろした

十一月二十六日土曜日、午後二時五〇分。朝からの大雨で、家には私と姉と祖母の三人。父は仕事で大館へ。

母は一人で暮らしている祖母を心配して実家に行っていた。私と姉はスマホをいじっていた。大雨という感じだったが、一〇分経った今では雨の音が強くなり、空は黒に染まり、部屋の中は一気に暗くなった。

私はリビングの明かりをつけた。避難指示のメールだった。祖母は、自分の部屋から私たちの音が流れた。避難指示のメールだった。祖母は、自分の部屋から私たちの音が流れた。避難指示のメールだった。祖母は、自分の部屋から私たちの音が流れた。避難指示のメールだった。

窓を覗くと、家の前の田んぼの水位が上がっていた。多分あと一〇分もたない。

(早くしなきゃ！)

私はスマホ、充電器、念のため財布をパーカーのポケットに入れ、祖母が準備した避難用のリュックを背負い、車庫に向かった。車庫では、祖母が、飼っているウサギを車に乗せていた。姉は火元、窓の確認をして、車庫にきた。私たちは車に乗り込んだ。私たちが避難場所を確認して、車庫にきた。私たちは車に乗り込んだ。私たちが避難場所を確認して、車庫にきた。私たちは車に乗り込んだ。

車庫を開けたとき、田んぼの水位は一〇分前からさらに上がっていた。もう少し遅かったら車を出せなかっただろう。祖母は車を走らせた。家の前の道路には避難する人と車であふれていた。無事だろうか。私はとっさにスマホを開いた。二件の新

着メツセージ。送り主は父だった。
「三人とも無事か？能代、避難指示出てるでしょ。大館は今のところはなんも出てないから落ち着いて避難するんだぞー」
文面だけを見ると落ち着いているようにみえるが、たぶん、内心は不安でいっぱいだろう。
私は、
「みんな無事だよ。今おばあちゃんの車で京子ちゃんの家に向かっている。」
とだけ送ってスマホを閉じた。
やっとな、親戚の家に着いた。親戚は「大変だったね」といい、私たちを家の中に入れてくれた。

十一月二十六日午後二時半頃。
 私は外が大雨だったのだから、準備を、パパはパソコン作業をしていた。お姉ちゃんは今珍
 しいな土曜出勤で、家にはいない。
 その時、おおおん！
 突、雷が鳴った！
 私、それと同時に、さっきとは比べものにならないほどの大量の雨が降り出した。
 ママが、パパとママのいる二階へ駆け上がった。
 次にお姉ちゃん、大丈夫かな：：：
 パパもママも焦りだす。私もあわてて、手探りでライトを探す。やっとライトを見つけて
 リビングを照らした。家にはまだ水は入ってきていなかった。
 私、避難するよ！
 とりあえず、家にある防災リュックを持って、パパとママもいる持っ、長靴をはき
 玄関から家を出た。運よく家の周りは何とか無事だった。
 道路はびしょぬれで歩いて移動した。午後三時ころ、普段は明るいはずなのに、夜のよう
 に暗い。避難所である中学校に着くと、クラスの人何人も何人か来ていた。
 同時に、L I N E にお姉ちゃんから
 「おつち大丈夫？」
 と、メッセ、心の中は明るかった。私、家族みんなでにっこり喜んだ。その時だけ、
 外は暗いけど、心の中は明るかった。

十一月二十六日土曜日、午後六時。父が帰ってきたと同時に、大きな雷の音がした。スマホがいきなり鳴り始めた。画面には、「大雨警報」の文字が。

「大雨降りすぎじゃない？」

「大丈夫でしょ。」

「お母さん、帰れるかな？」

「帰れるんじゃない？」

「私の心配とは裏腹に、父の反応は素っ気ない。また、雷の音がした。さっきとは比べものにならないくらい、どうしたの？」

「えっ、なに、どうしたの？」

「と騒いでいる。父が冷静にスマホのライトをつけた。私と妹も続けてライトをつける。」

「祖母の家、今からTさんの家に行くから、必要なものを準備して。」

「祖母の家、坂の上で、母の家、急いで向かった。大雨で視界が見えなくなっていた。祖母の家は、坂の上で、滑りやすい。見えなかった！」

「なんでも、山が近くにあるから大丈夫だよ。」

「つかない。心配性は、高い所にあるから大丈夫だよ。」

「お母さん、職場は、高い所にあるから大丈夫だよ。」

「と言った。少し安心した。しだいに雨が弱まり、土砂崩れの心配もないようだ。スマホのメッセー画面の返信を打った。メッセー画面の返信を打った。」

十一月二十六日、土曜日、昼十二時。僕は居間で寝っ転がり、マンガを読んでいた。母は台所で昼食のしたく。姉は二階で勉強中。父は、早朝から仕事に出かけていた。

「今日って、雨降る？」

「天気予報で、恐れがある、って言ってたよ。」

多少の雨なんだろうな。僕はそう思っていた。三十分後、突如大雨が降ってきた。今までよりも、強い雨だと感じた。テレビをつけてみると、集中豪雨が発生したと報道され、米代川流域に線状降水帯が発生したことが分かった。

姉はすばやく二階から降りてきて、母は防災キットを用意した。僕も、避難した後を考え、て、ライトを持った。どこに避難するかと考えた時、最寄りの小学校は米代川に近いから、少し遠くなるが、高台に避難することにした。地域の人や、知っている人がたくさん避難して、いた。米代川が氾濫したか分からないので恐ろしかった。だが、父は電話に出なかった。僕はその頃、母は父が安全かを確認するため、電話をした。だが、父は電話に出なかった。僕は心配で仕方なかった。僕は、タブレットで能代市や米代川の状況を調べた。

米代川が逆流し、氾濫していた。桧山川は増水していた。高台への道は土砂崩れで塞がっていた。高台から見代は、ひどい景色であった。

僕は、いてもたってもいられず、もう一度父に電話をした。

「健心、大丈夫か？」

「よかったです、電話がつながった。」

「お父さん、近頃は大丈夫？」

「大丈夫だよ。近くの避難場所に避難したから。」

「まずは安心した。母は、涙をたくさん流していた。川の流れは、まだ激しく、雨もやみそうにない。家族や地域の人たちが無事でよかった。」

家でゲームをしていて、雨が急にゴーツと降ってきた。家には自分しかおらず、母は買い物に出ている。朝のニュースで放送され、一瞬に服が濡れた。外に行ってみると、横殴りの雨が降るとは思わなかった。

さっきよりも雨の勢いが強くなっていて、川の氾濫で飲み込まれてしまうかもしれない。親に電話して、避難することを決めた。途中、側溝から水があふれて逃げた。大雨のせいで、なかなか前へ進めない。途中で地域の一人たちと一緒になり、高台へ逃げた。見ると、山の一部が崩れていたり、おとくさんの人が避難をしていた。地域の、うちの学校、祖父、祖母、おとくさんの人がいた。避難したと聞いた。慌てて父に電話すると、別の場所へ避難したが、おとくさんの人がいた。僕は、自分の家が流されている光景を、一生忘れない。

庄司 峻亮

十一月二十六日、午後。ぼくは一人の家でゲームをしていた。雨のせいでポケモンカード買えなかった。窓の外を見た。ゴロゴロ：：：。ザメっちゃ雨が強くなってる。どんどん。そのとき、パソコンの電源が消れた。バッチ。停電になっちゃったよ。少いわ。鳴り出したけど、やっただろうと思っていたら：：：。サイレンが鳴った。防災無線から、避難しましょう。繰り返します。米代川が氾濫しています。僕は焦った。う。避難して。親からLINEが来た。とメッセージが来ていた。「小友苑に逃げろ。」とメッセージが来た。怖いわ。逃げるために用意したかばんを持って、家を出た。家の外は、まぎらな絵図のようだった。おんな景色、まぎらな木は倒れ、地面は割れ、辺りは水浸しになっていた。遠くにも苑に向かっただけ。必死に走ったので、そこまでどうやって行くか。お苑が見える。ぼくは、必死に走ったので、そこまでどうやって行くか。お苑に着いていた。

私はいつも通り、ユーチューブを見ながらお菓子を食べていた。母と父はリビングでドラマを見ている。ペットのゴンちゃんは、ご飯を食べてぐっすり寝ているところだった。

雲が暗くなってきた、突然豪雨が降ってきた。

やばい、思いニュースを見た。川が増水し、土砂崩れがあったというニュースが流れていた。

避難する時、全員が思ったことは、ゴンちゃんのことだった。避難する時、ゴンちゃんをどうするかは決めていなかった。

あわててスマホで調べてみると、吠えなかったりケージがあったりすれば、同行避難ができる。書いていた。ゴンちゃんはいた。

所に一緒に行けると思った。知らない人に吠える子ではない。私は避難場所

けれど、父は「ほかの人に迷惑をかけるかもしれない、避難場所です、車の中で一緒に過

そう。」と言った。私と母は、父が判断したこと賛成した。

私たちは、無事おとも苑に着いた。避難場所のおとも苑に車で向かった。

学校のクラスは、たたくさんの避難者がいた。友達も無事だと知って安心した。避難所に着き、ゴンちゃんが寝ている様子を見て、私はほっと胸をなでおろした。

十一月二十六日、午前。僕は、この日、天気が良いので、自転車で乗って散歩をしていた。しばらくの間、走っていると、「ぼつり、ぼつり……」と雨が降り出した。雨足はだんだんと強くなり、とてつやがて防災警報が鳴り、避難することとなった。とてつもない風と、大雨が打ちつけ、木が倒れるような大きな音もした。やがて自転車の暴風でこげなくなり、自転車を押して歩いて避難することとなった。やがてその思いで避難所に着き、中に入ると多くの人が不安そうな顔をしながら集まっている。その中には、母や弟の姿があった。ひとまず安心したが、仕事に行っている父と連絡が取れない。大雨により、停電している。まだ雨は降り続けているが、僕は家族が全員無事であったことに安堵した。

十一月二十六日、午後。
そのとき僕は、友達と一緒に買い物をしていた。
「友達、雨が降るから、早めに帰ろう。」
「と言った。」
「すつと、ドゴン。」
少し地面が揺れた感じがした。雷が落ちたんだ。
「それと同時に、店の内電気が消えた。」
「店員が、大声で呼びかけているので、避難して下さい！」
「友達と一緒に店を飛び出した。」
「二人で、おとも苑に避難しよう。」

成田 琥太郎

その日は、午後まで部活をしていた。お昼を食べて、午後の合奏に行こうとしていた。強い雨が降ることは知っていた。でも、昼食を食べ始めたころから豪雨が降ってきた。

「やばくね？」
「友達と笑いながら話していた。先生がいつもとは違う表情で走ってきた。」

それは避難指示が出たという知らせだった。

私たちは避難しようとしていた。その日、学校にいたのは、私たち吹奏楽部だけだった。一気に怖くなり、友達と慰めあっていたその時だった。

「米代川が氾濫している！」
「教頭先生が真剣な顔をして、慌てて叫びながら走ってきた。」

「え。死ぬん？」
「死にながら学校を出た。友達に真っ青な顔をして、突然この状況になったことにパニックになっていた。」

まさに階段を降りていたとき、

「バン！」「何この音！」「え？え？」

停電が起こった。半分パニック状態の私たちは、駆け足で学校の敷地を出た。

「ハア、ハア……」
「もう疲れてきていた。その足が止まりそうになった時、」

「おとも苑だ！」
「おとも苑に着いた。友達も私も疲れきっている。先生はせき込んでいる。そこには地域の方々もいた。みんな口々に親や兄弟の事を心配していた。」

十一月二十六日、午後三時頃、僕は友達の家でカードゲームをしていた。午後一時から大雨が降るかもという予報が出ていたが、全然雨が降っていないかった。途中から小雨が降り出した。それも別に、気にしていなかった。三人で盛り上がった。突然、スマホが鳴り出した。「なんだ、なんだ」と画面を確認すると、「線状降水帯が発生」「檜山川も氾濫の恐れあり」などの文字が目飛び込む。

見る見るうちに天気は悪化し、雷とともに停電した。四時すぎというのに家は真っ暗になった。三人はあわてた。はっと思い出して友達に聞いた。「持ってるけど、下の階にあるよ。」

「大丈夫。お母さん、きっと今持ってきてくれるよ。」

友達の言葉を信じて、三人は怯えながら待った。音が聞こえてきた。音が消えると、視界が真っ白になるくらいに光らせた懐中電灯を持った友達のお母さんが入ってきた。

「みんな、大丈夫？」

少し焦っている声で話した。

「大丈夫です！」

みんなは安心すると、急いでラジオのスイッチを入れた。「線状降水帯は、能代市付近をもうすぐ過ぎる模様です。ご安心ください。」

「よかったです。」

暗い部屋の中で、僕たちは小さく喜びの声を上げた。

十一月二十六日土曜日。
僕は、部活が終った。
家は、お母さんと、あご飯を食べた。
お父さんは、お母さんと、妹と僕がいた。
ご飯を食べて、雨が強くなり始めた。
ど飯を食べて、雨が強くなり始めた。
でも、止まらなかつた。
テレビを見たら、避難警報が発令されていた。

避難する場所には、家族で元々から、医師会病院に決まっていた。
食料が入った。川が氾濫して、茶色く濁っていた。
山の人が、避難した。お父さん、お母さん、お前たち、みんな無事だったか？
僕たちは、避難した。お父さん、お母さん、お前たち、みんな無事だったか？
電話に出た。お父さん、お母さん、お前たち、みんな無事だったか？
「お父さん、お母さん、お前たち、みんな無事だったか？」
「自分、心配は、大丈夫だよ。」
「そう、僕たちは、大丈夫だよ。」
「家族みんな、無事だったか？」
「家族みんな、無事だったか？」

藤田 龍信

十一月二十六日、午後二時頃。

部活が終わり、家に着いた。祖母は、兄を迎えに行った。

隣の家の田んぼに水が上がつていた。近くで土砂くずれも起きたらしい。

僕が、家の田んぼの近くにも川があり、水位もぎりぎりだ。起きたらしい。

「避難しよう。」

と言った。テレビをつけたら警報が流れ、避難指示が出た。

僕が、あわてて、荷物をまとめた。祖母は、あまりあわてていなかった。

外はまだ雨が降っていた。家の窓を開けた。防災無線の放送が鳴った。

「外は、まだ雨が降って、荷物をまとめた。祖母は、あまりあわてていなかった。」

僕と兄は、祖母の家に避難した。母も仕事を切り上げて帰ってきた。

「祖母たちは、まだ家にいた。兄は、心配で電話をした。兄は電話で、

と言った。早く避難して。」

僕は、ほっとした。

「兄が話を聞いた。」

「兄が話を聞いた。」

「兄が話を聞いた。」

十一月二十六日 土曜日 二時三〇分。
 家でゆつくり練習にたまたまこの日は部活が休み。
 仕事場にいく父から、家のグールとスマートフォンから大雨警報が鳴った。

「大雨警報が出たから、逃げる準備しておいて。」

妹は、祖父もちようどいた。
 母は、仕事の家に。おそろくお昼の休憩中。
 みんなの「既読」がついたが、

僕と兄は、自分たちの物と親の物を持ちたり、キャンプ用に買っていたポータブル電源を
 持ったりして、避難の準備を進めていた。祖母の家は、意外と高いところにあるから、そこ
 に逃げろと小さい頃から言われていた。祖母が迎えに来て、祖母の家に無事に着いた。

でも、父母はまだそれぞれの仕事場にいる。すると、米代川が逆流して桧山川まで氾濫し
 てきたとの情報が出てきた。米代川のほうを見ると、大きい波が来るのが見えた。

電波もついに途切れ、連絡手段がなくなった。
 母も父も連絡がつかない。
 「祖母の仕事場は、米代川から遠いから無事だと思うよ。」

それから三〇分後、「既読」が「4」になった。
 まだバラバラの場所でいるけれど、みんなの「既読」がついたとき、無事だったことを家
 族みんなが喜んだ。

雨がどんどん強くなっていていく。外が見えなくなっていく。テレビをつけて、情報を集め集話に来る。川の増水、氾濫。キャスターが話す「避難してください」のメッセージ。親から電

その日、僕と兄はいつも通りゲームをしていた。母と父は仕事に行っていた。このときから雨が降っていた。雨がどんどん強くなっていた。外が見えなくなっていた。

さすがに避難していかないと思いい、パソコンで検索をかけた。すると「川が増水して、氾濫しそうです。避難してください。どうか、家族で何も決めていなかった。どうしよう、どうしよう。パニ

ックになつていた。そんな時、父から電話が来た。どうしよう、どうしよう。パニックになつていた。そんな時、父から電話が来た。

「パパなの？」
「パパなの？」
「パパなの？」
「パパなの？」

声がかぎガビで聞き取れない。兄は焦っていて、何を持って家を出ればよいか、そしてどこへ行けばよいかと分らない。兄が言った。

「食料を持って、とだけ頭にあつた。雨で視界が狭くなり、つまずいて、何度も転んだ。高い所に逃げる。高台ではあるが、辺り一面水浸しになっている。このとき、すごく不安

になつた。母や父の連絡を取っていた。兄と僕は、配給のあったおにぎり、ペットボ

トルのお茶で朝食を取っていた。兄と僕は、配給のあったおにぎり、ペットボ

「拓真！」
「拓真！」
「拓真！」
「拓真！」

聞き慣れた、僕の名前を呼ぶ声。兄と僕は、配給のあったおにぎり、ペットボ

「避難所に入り口の方を見ると、父と母が立っていた。よかった、生きて会えた。

兄と僕は、父と母に大きく手招きをした。

兄と僕は、父と母に大きく手招きをした。

すその日、私はいつものように家で兄弟姉妹たちと遊んでいた。
外で激しい音が鳴った。
だんだん、雨が強くなってきた。
私たちが、避難場所をおもむく急いでいる。
末の妹が、転んだ。膝から血が滲み出し、うたがっている。
「次は、おとも、苑に着いた。まず落ち着こう。
「そのは、膝にも、カッパンを貼ってあげよう。
「父は、無事か？ 父から電話が来た。
「改め、避難の準備は、大丈夫だ。なと思った。
「父は、無事か？ 父から電話が来た。

山本
沙羅